



ポリフォニーとしての小説

今、現代文で『こころ』をやっているとだろう。一方、センター試験に変わる新しい共通テストでは、「駐車場の使用契約書を読んで不動産屋さんに異議申し立てをする」といった問題が試行版として出題されている。さて、国語教育はどうなっていくのだろう。

後期中間考査の後に学習する「言語が見せる世界」の著者、野矢茂樹さん（東大教授、哲学）がおもしろいことを言っている。引用してみよう。（「週刊読書人」11月3日号）

＊

野矢 私は、文学は高校では「国語」から切り離して、「美術」「音楽」「文学」と、芸術の選択科目にしたらいと考えています。ただ詩歌や随筆は外しても、小説だけは国語から外せない、という気持ちが芽生えてきているんです。小説を教材にすることによって鍛えることのできる力で、芸術的な力ではなく生活や仕事に関わる実際の力には二つあると思うんですね。一つは人生や社会における個々のエピソードをたんに羅列するのではなく、それを一つの物語として組立てる力。そしてもう一つは小説の中の、ポリフォニー（多声音楽）的な要素。つまり、主人公一人の目から見た物語だけでなく、複数の登場人物の、それぞれの視点から語り出されたものを、他人の視点に立って受け取ることができる力。こうした力は社会を生きていくのに、とても大切だと思っています。先ほど話した、大学入試の新しいモデル問題では、契約書など、かなり実用的なものを資料として読ませる。でもそうした実用的な文章読解力だけでなく、物語を読み取り、組立てる力と、

複数の視点をポリフォニー的に捉える力は、国語教育から外してはいけないのではないかと。

難波 そうだとしたら、文学を国語から切り離すことは難しいでしょうね。文学の大きな部分を小説が占めていますから。

野矢 いや、私は文学の基本的なかたちは詩だと考えているんです。言葉そのものが力を持ち、輝いている。ストーリーなどは、文学にとってそれほど重要ではない。小説であっても詩と同じで、文学の力とは、どういう言葉が、どのように使われているのか、だと。そうした言葉の輝きを受け取る力は、まさに芸術的感性なので、必ずしも全ての人が持てなくても構わない。例えばクラシック音楽を聴く耳を持っている人いない人がいるように、言葉の芸術的な輝きを、受け取れる人も受け取れない人もいてかまわない、と思っています。

難波 なるほど。小・中学校までは国語として一つだったものを、高校では詩を中心にした言語芸術として、文学が芸術科の専門科目となり、ナラティブな小説のみ国語科目に留まると。それは一つの有効な改革案だと思います。（以下略）

＊

対談相手の難波博孝さんは、広島大学教授で国語教育の専門家。新しい指導要領では、今の国語総合は「現代の国語」と「言語文化」という二つの科目に分かれ、今学習している「現代文B」と「古典B」は、「論理国語」「文学国語」「古典探求」といった科目になるらしい。いやはや、どうなることやら…。